

大学教育におけるキャリア教育偏重の問題と 能動的シティズンシップ教育の可能性

三浦 大輝

本論文は、日本の大学教育においてキャリア教育が過度に偏重されている現状を問題視し、その結果として大学固有の学びや、社会の構成員として必要な市民性が十分に育成されていない点に指摘を行う。加えて、その改善策として「能動的シティズンシップ教育」が果たし得る役割と可能性を明らかにすることを目的としている。

第1章ではまず、日本型雇用の特徴とその変化を整理している。メンバーシップ型雇用は職務内容が明確でなく、OJTを前提とした長期雇用や年功的賃金を特徴とするが、この仕組みは限界を迎えつつある。企業はコストのかかるOJTを外部的に、大学に対して職業教育やキャリア教育を求めようになった。その結果、大学生は就職に役立つ知識の獲得を強く意識し、大学側も学生需要や政策要請に応じてキャリア教育を強化している。学生意識、政策、経済界の要請が重なり合うことで、日本の大学教育では職業教育主義が一層強まっている現状がある。しかし、このようなキャリア教育の偏重は、人格形成や社会参画といった大学教育の本来の役割を軽視する危険性を孕んでいる。OECD エデュケーション 2030 や中教審答申(2018)では、幅広い教養、高い公共性・倫理性、複雑な社会課題を構造的に捉え改善していく力を備えた人材の必要性が強調されているが、現行のキャリア教育中心の大学教育では、これらの能力を十分に涵養できていない。こうした問題意識から、新自由主義やグローバル化を乗り越えるための教育として、能動的シティズンシップ教育に注目する。

第2章では、シティズンシップ概念の歴史的変遷を整理する。マーシャルによる「権利としてのシティズンシップ」は、福祉国家の発展とともに一定の役割を果たしたが、市民の政治的・社会的受動性を助長するという限界を持っていた。新自由主義やグローバル化の進展により、この枠組みは批判され、参加とアイデンティティを重視する「能動的シティズンシップ」が提唱されるようになった。先行研究の整理を通じて、能動的シティズンシップ教育で育成される能力は、社会的リテラシーと批判的思考力を身につけ、複合的なアイデンティティを形成する力、公共

的課題について他者と討議し解決を図る力、協働を通じてコミュニティや民主主義を支える力の3つに整理される。

第3章では、日本における能動的シティズンシップ教育がキャリア教育と十分に区別されず、混同されている現状に対して批判的な検討を行う。経済産業省のシティズンシップ宣言は、市民参加を強調する一方で、経済的自立や自己責任と結びつけられ、新自由主義的枠組みに回収されていると指摘されている。その結果、能動的シティズンシップ教育は「社会人基礎力」などのキャリア教育的能力に矮小化され、本来の目的が十分に達成されていない。キャリア教育と能動的シティズンシップ教育は、育成する能力に重なりがあるものの、前者が「社会人・職業人」を前提とするのに対し、後者は「市民・民主主義の主体」を前提とする点で決定的に差異がある。

第4章では、能動的シティズンシップ教育が大学固有の学びに果たす役割が論じられる。キャリア志向による学びの手段化は、正解のない課題について根拠をもとに自ら考えるという大学固有の学びを阻害しているが、社会問題や民主主義を題材とする能動的シティズンシップ教育は、こうした学びを促進する可能性を持つ。また、シティズンシップ教育は個人に責任を押し付けるものではなく、社会構造を批判的に捉え、連帯や社会変革を志向する教育として実践される必要がある。その具体的方法として、少人数のグループワークと対話的リフレクションを重視した教育実践が有効であると結論づけられる。

以上より本論文は、過度なキャリア教育偏重を是正し、大学固有の学びと公正な社会に資する能力を育成するために、キャリア教育と明確に区別された能動的シティズンシップ教育を大学教育の中に位置づけ、実践していく必要性を示している。